

いのちと地域を守る



水に漬かった岡山県倉敷市の真備町地区。右奥にある下水処理施設も水没した=7月8日

既存施設 工夫し使用

考える

衣食住に加え、日常生活で欠かせないのがトイレ。災害が発生した際、いかに設備を確保し、衛生状態を維持するかが重要な問題だ。阪神大震災や東日本大震災、熊本地震に続き、今年7月の西日本豪雨でも浄水場の損壊や断水で、各地のトイレが使用不能に陥った。災害時には避難者の健康に及ぼす悪影響も危惧される。「トイレの視点」から防災対策を考えたい。

災害時のトイレ対策

災害時に既存のトイレを使用するための方法を記したポスターを掲げ、対策を説明する加藤代表理事



7月の西日本豪雨で約2100世帯が浸水し、下水処理施設が水没した岡山県倉敷市真備町。同市下水施設課によると、施設は3日後には応急処置で仮復旧したが、完全復旧は来年以降にずれこむ見通しという。9月末現在、浸水被害にあった各家庭のトイレの復旧は半数程度にとどまる。

市は避難所以外にも、公園や学校などにも仮設トイレ約100基を設置しているが、同市真備町の無職女性(65)は「仮設トイレは衛生面で使用するのに抵抗がある。水を飲まないようにしている」と話す。

「排せつは健康上の重大問題。対策は急務だ」。災害時のトイレ問題を考えるシンクタンクNPO法人「日本トイレ研究所」(東京都)の加藤篤代表理事は指摘し、現状を嘆く。

トイレの水が流せなくなり、汚れやにおいがひどくなり、感染症の危険性が高まる。加藤代表理事は「汚れたトイレに行きたくない」との思いにより、飲食の回数や量を減らす傾向が強まり、エコノミクス症候群など健康悪化につながることも指摘する。

避難所の運用 責任明確に

阪神大震災だった。兵庫県の9割以上に当たる125万世帯が断水。完全復旧した同年4月中旬まで避難所のトイレはふん尿があふれ、男女を問わず屋外での排せつを余儀なくされた。神戸市のパキウムカーは19台しかなく、詰まった水洗トイレの復旧も遅れたため、「トイレパニック」との言葉が生まれた。

2011年3月11日の東日本大震災では、阪神の教訓を踏まえ、被災自治体が仮設トイレを手配したが、日本トイレ研究所の調べによると、設置されるまでに4日以上を要した自治体は全体の約66%に上った。

研究所が被災者に実施したアンケートでは「和式の仮設トイレでは障害者、高齢者の使用は難しい」「女性、子どもにとっては入りにくい」との回答が多かった。また在宅介護の現場では、トイレが使用できない」と回答した人の約半数が、日常生活の動作能力が低下したという。

国は震災の事例を踏まえ、14年3月に文部科学省、15年11月に環境省、16年3月に国土交通省、同年4月に内閣府が災害時のトイレ対策に関するガイドラインを策定。避難所ごとにトイレの必要な個数が示されたが、具体的な配備計画は各自治体に委ねられている。今年9月現在、独自に計画を策定した自治体は徳島県など少数にとどまる。

伝える

2011.3.11



三浦兼男さん

気仙沼市本吉町の漁業三浦兼男さん(67)は東日本大震災の発生時、気仙沼港から船を沖出した際に津波に巻き込まれ、船につかまらないうちに津波にさらされて流された。九死に一生を得た経験から「沖出しは慎重に考えるべきだ。命が最優先だ」と訴える。

沖出しで津波にのまれる (気仙沼市)



3月11日は、会合のあった宮城県漁協大谷本吉支所で地震に遭いました。立つていられないほどの揺れに、津波が来るぞと直感。気仙沼港に係留している船を守らなければと、つぎに思い、仲間と2人で軽トラに乗り込みました。



大破した状態で見つかった三浦さんの船。2011年3月25日、気仙沼市(三浦さん提供)

命を最優先に逃げる

山側の道路を通り、港に着いたのは午後3時半近く。それぞれ自分の船に乗って、津波が来るぞと直感。気仙沼港に係留している船を守らなければと、つぎに思い、仲間と2人で軽トラに乗り込みました。カールソコから「5歳の津波」と聞こえましたが、「大したことはないだろう」と受け止めた。港の可能性がある国道を避けて

しまった。後悔しました。大浦地区の付近まで進んだところで先に沖出した船が2隻が反転して戻り、後ろから白波が迫るのが見えま。油のタンクやフェリが次々と魚市場側に流され、なすすべもなく船を波の渦に漂わせた。大きな波が近づき、転覆しないよう船首を波に向け、ガーンと音がして船が動かなくなりました。スクリューに漂流物が巻き付き、浸水して横倒し。目の前では浪板地区の家々がボンと浮き上がり、押し流されていきます。怖いというより「もはやこの世ではない」という感覚でした。

判断阻む三つのバイアス

心理切り替え避難を

判断しては、事前に避難情報が発令され、避難するための時間は多く、避難する必要がある。いつもと異なる事態が発生しても、普段の生活の範囲内の出来事として捉えようとする。災害の危険が予測される時でも、決して大ごとにはならないだろうと思ってしまう。「数十年前に1度の豪雨も」

探る

東北大災害科学国際研究所教授 邑本 俊亮さん



むらもととしあき 北海道 大学院博士後期課程単位取得退学、同大学院助手、北海道教育大札幌校講師、同助教授、東北大学大学院情報科学科准教授、同教授などを歴任。12年4月から現職。専門は認知心理学、教育心理学。富山県出身。56歳。

つもより少し激しい雨」とする。これが「確証バイアス」と呼ばれる。次に、私たちに自分のことを客観的に考える癖がある。ちょっと変わったことがある。たとえ他地域の人が被災した報道を見聞きしても、「自分の住む地域に災害は起きない」「自分は被災しない」と勝手に思い込んでしまう。「客観主義バイアス」と言われる。また、いったん「自分は大丈夫」と思ってしまうと、その証拠を探し出し、一方で自分の考えに合わない事実を無視する傾向がある。「過去に警報が出たけれど被害はなかった」「昔からこの地域に災害は起きない」と言われている。「あの防波堤があれば大丈夫」などと、考えを確かにする証拠を見つけ、自分は被災しない、素早く避難行動を取ることが重要になる。

帰還した町で初めて訓練

福島県富岡町・富岡一中教頭 山田 久吉さん(54)



人が、約2*先の高台へ駆け上がりました。17分で避難を完了しました。子どもたちは春に町に来たばかり。町内のどこに何があるかもまだ分かっていません。私たち教職員が子どもたちの命を最優先に訓練を重ね、子どもたちの防災意識も向上させていきたいです。

食料備蓄と自助意識大切

仙台市婦人防火クラブ連絡協議会長 八木 弥生さん(75)



訓練をして、参加者と災害への対応を考えています。訓練を通して住民同士の信頼関係ができれば、非常時の助け合いにもつながるのではないのでしょうか。大切なのは食料の備蓄と自分の命を自分で守る意識です。市民に呼び掛け、災害時の犠牲者を減らしたいと思っています。

現場から